

週刊教育資料

2016年8月1・8日号

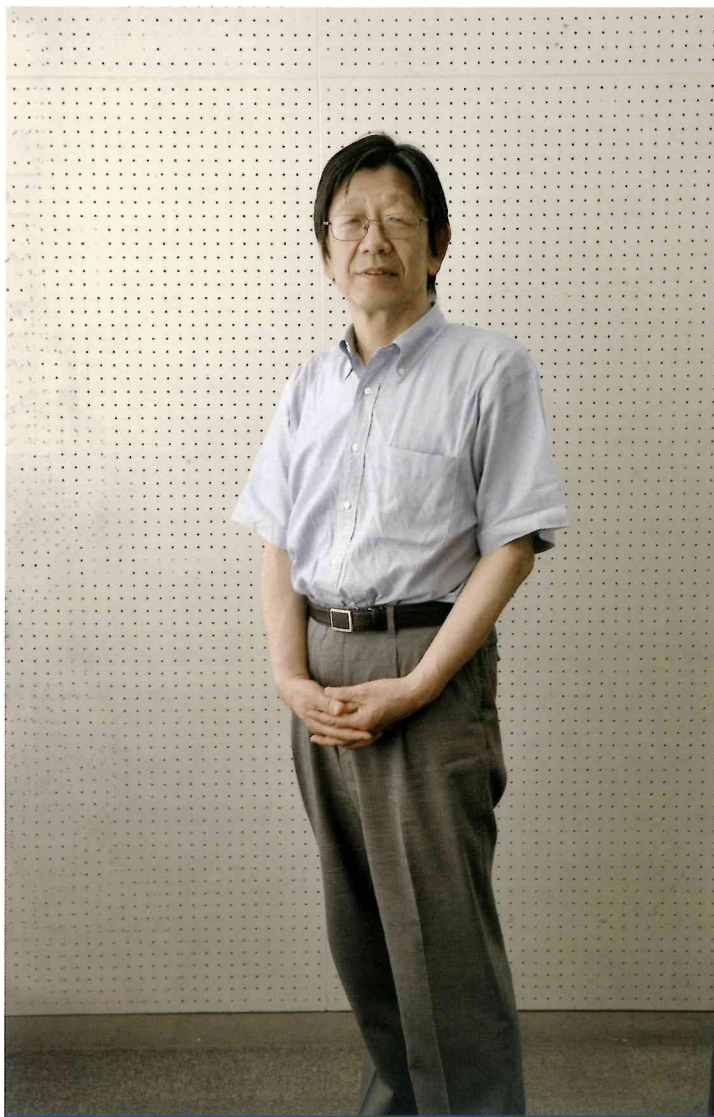
No.1397

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION

http://www.kyoiku-shiryō.co.jp

好批評連載

- 法律相談【メール・トラブルで被害生徒保護者から情報開示請求】三坂彰彦／弁護士
- 危機管理【教育現場で共有してほしいスクールソーシャルワークの実践力】安藤博／子ども法学者
- 特別企画【教育課程部会「審議のまとめ」に向けて構成案検討】



▼資料【総則・評価特別部会、小学校部会、中学校部会、高等学校部会における議論の取りまとめ(案)・概要下】
◎中央教育審議会・教育課程部会

▼マイオピニオン「どなたか存じませんが…」
◎平野啓子／語り部・かたりすと

▼校長講話【清掃時間の子ども姿を伝える】
◎野口晃男／前盛岡大学非常勤講師・元岩手県盛岡市立中野小学校校長

▼潮流【歴史的町並みの保存と暮らしの共存を】
◎福川裕一／特定非営利活動法人全国町並み保存連盟理事長

福川裕一

ふくかわ・ゆういち◎東京大学大学院修了。工学博士。明治大学を経て千葉大学建築学科(住環境創造デザイン)教授。専門は、都市計画、歴史的環境の保全(町並み保存)、既成市街地(中心市街地)再生、土地利用計画・規制システムなど。2015年に退官し、現在は千葉大学名誉教授。小学校高学年以上対象『ほくたちのまちづくり』(若波書店)を上梓。

人間は万物の霊長であるという。その生まれ持った能力を最大限に生かしてほしい、立派に成長してほしいと親は願う。しかし、その親の子育てはどうか、「はじめの教育」を忘れてはいないか、と著者はいう。

人間の子どもの未熟で生まれてくる。手足を思うように動かさないし、目もよく見えないが、耳はよく聞こえており、母胎内で親の聞こえている音を感じていると言われている。授乳と同じくらい早く、もっとも大切な知識である言葉かけが行われること、聞く力を育てるのほども意味のあることだといふ。著者は学校に行く前の学校、家庭という学校の大切さ、家庭教育の復権を説く。

近年、日本の家庭は大きく変化した。社会も変わった。女性の社会進出が進み、少子化も進んだ。保護者の肩代わりとして保育所が期待され、保育所不足が社会問題化しているが、保育



家庭という学校

外山 滋比古 著
799円 ちくま新書
☎03-5687-2680

所の所管は厚生労働省であり、保育所は福祉施設であって教育機関ではない。著者は「家庭という学校が荒れて、もつとも被害を受けるのは、生まれてくる子どもたち」だと指摘し、訴えることができない幼い子どもたちの声なき声を代弁するつもりで本書を書いたという。

子どもの能力が高いのは生後40カ月くらいの間で、放置されているうちに枯渇してしまうとのこと。「ハコ入り子ども」と学級崩壊、小中一貫の「トコロテン教育」、歩き始めた幼児がこるぶ経験をするこの大切さ、よく学びよく遊ぶこの意味など、改めて考えさせられた。

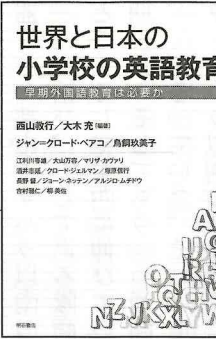
評論家、随筆家として名高い著者の問題提起は示唆に富む。(元川崎市立中学校校長・青木幸夫)



日本では、2020年から小学校で英語が教科化される。本書は「国際社会の中で早期言語教育を考える」というテーマで、子ども達に対する言語教育について、世界の早期言語教育の事例研究と日本の小学校英語教育の事例から、各々の執筆者の専門分野を基にして述べられている。

序章では早期外国語教育のあるべき姿について、ペアコ氏(ソルボンヌ・ヌーヴェル・パリ第3大学名誉教授)に行ったインタビューにより、開始年齢、母語習得への影響、到達度等から「早期言語教育の目的がこれまで以上に英語力をつけることだけであり、英語以外の第2外国語教育が展望に入っていないなら早期にする必要がない」と結論づけている。

第1章では、ヨーロッパ(EUとCOE)、ヴァッレ・ダオスタ(イタリア)、アララバ谷(スペイン)、ギリシャ、カナダの早期言語教育について、第2



世界と日本の小学校の英語教育 早期外国語教育は必要か

西山教行、大木充 編著
3456円 明石書店
☎03-5818-1171

章では日本の小学校英語教育について、「小学校英語は明治初期に始まったこと」や「教育現場の多言語状況を踏まえた上での国際理解教育としての外国語活動」など、歴史的な視点や国際理解教育の視点、言語学的な視点等から、各専門家の研究をベースにして述べられている。

終章では、「日本の小学校英語教育」の課題について鳥飼久美子氏の意見が述べられている。鳥飼氏自身が私立の小学校で英語教育を受けた体験があった母親から教わった発音を教師がカタカナ英語の発音に矯正したというエピソードから、英語を導入するための条件整備が必要であること、とりわけ、教師の質的向上は不可欠であることを主張している。

「グローバル化に対応した英語教育の改革」が進められている中で、「日本の早期言語教育がどうあるべきか？」を再考するために、小学校の教師はもとより教育に携わる方に読んでいただきたい1冊である。(愛知教育大学教授・高橋美由紀)